



# コメは豊年、 ひととも万作

自然栽培パーティーの稲刈りの一番手は、愛知の豊田市、無門福祉会の田んぼではじまった。

選ばれた田は、加納稲荷神社の横。一〇時三〇分開始だが、九時を過ぎればそろそろとやってきた。

近所さん、地主さん、自然栽培仲間、福祉関係者が、あぜ道を取り囲む。ヤギ二頭、コンバインも乗り付ける。

子どもが駆け回る。

「ぼうず、大事にしろよ、オシらのコメやからな」と、障害者の高らかな声が田んぼにひびいた。さあ、稲刈りをはじめろぞ。



編集部=文  
text by KOTONONE  
岸本 剛=写真  
photograph by Tsuyoshi Kishimoto

## バケモノや、と佐伯さんは叫んだ

稲の穂、ゆつたりゆつたり揺れている。「こは、沖縄のような亜熱帯の感じで、夏は蒸し暑い。だから稲がバケモノみたいになる」。それにしても、「でき過ぎだ」と自然栽培パーティーのリーダー佐伯康人さんはつぶやいた。はじめて無門福祉会を訪ねて、あちらこちらの畑を見せられたとき、「土はもうカチカチで、正直言うとうと、作物が苦しんでいるような感じがした。無門の何をやってほしいんだっていう悩みが畑に出ているようだった」。

無門のスタッフは、どのように立ち向かったのか。六月六日に田植えた稲は見事に実った。一本植えの苗が、五〇本を超える太さになった。

スズメが空を舞う。「自然栽培は、稲も丈夫だから、スズメが稲の穂に止まれるんだよね（佐伯さん）。ということは、スズメに狙われやすい。強さは弱さ。自然界はおもしろい。

無門が選んだコメの品種はイセヒカリ。平成元年に伊勢神宮神田で発

見された新種。荒れ狂う台風の中、ヒカリの田んぼに、たった一株だけ生き残った。黄金色に輝く稲を育ててみると、虫や風雨にも強く、収穫量も多い。何より、モチモチした食感で、味がいい。神宮より「イセヒカリ」と名をいただいた。難点は、登録品種でも、奨励品種でもないこと。公の市場に流通できず、農協でも正規には扱えない。原種の保存も種籾の生産も、公的機関ではなく、地元で守り継がれている。

## 宣言しよう、農業は障害者が担う

稲刈りの開始は一〇時三〇分からも、九時を過ぎると、一人二人とやってくる。田んぼの地主の赤川幸子さんが、ふだん着姿で下見に来た。あぜ道に立つて、「ようできたなあ」と第一声。もう農業はやらない。機械を入れたら赤字。肥料代も高くて、とても儲からない。「やっぱり年も取つてきよるんで…。でも、後でスポン変えて、百姓のカッコウしてくるけんね」と、いそいそと帰っていった。

ヤギ二頭も到着した。地元で自然栽培